

動物の絵 日本とヨーロッパ ふしぎ・かわいい・へそまがり

府中市美術館(府中市) 前期 21. 09. 18~11. 28 後期 10. 26~11. 28



2000年に開館した「府中市美術館」は、都立公園「府中の森公園」内の自然環境に優れた所であり、常設展示として「約2000点」の収蔵品の中から展示を行っているが、今回開館20周年記念として開催されるのが「動物の絵の展覧会」である。

他に、遺族から寄贈された作品を展示する「牛島憲之記念館」コーナーに、現代美術や江戸などをテーマにした企画展も開催されている。

主な収蔵品としては大久保一丘《真人図》、青木繁・福田たね《逝く春》や小林清親・井上安治の光線画などの作品がある。

円山応挙《雪中狗子図(せっちゅうくしず)》 1784年 絹本墨画淡彩 1幅



雪の中で小犬が戯れている様子で、雪原に印された小さな肉球の跡、ころんとしたフォルム、つぶらなまなざしの動物の「かわいい」要素を一切合切詰め込んだような一幅である。作品は、西洋画法を用いて立体的に描かれて、奥の茶色の犬と手前白い犬の上に乗りにかかる黒白の犬には、ふわふわした毛が生えている。その一方で、白い犬は輪郭みの描線によって、丸っこい形のかわいらしさが描かれている。西洋絵画のように徹頭徹尾全て描写するのではなく、描くことによってかわいくなる部分だけをリアルに表現されている作品である。

重要文化財《春日鹿曼荼羅図》 絹本 著色 掛幅 一幅一鋪 鎌倉時代



金銀泥(きんぎん)で彩られた飛雲の上に、明るい体色の鹿が立ち、多彩な障泥(あおり)や胸懸(むながい)・尻懸(しりがい)などとともに鞍(くら)を着けている。その上に立てた榊(サカキ)の枝には藤の蔓(つる)が絡まって、花房を垂らして枝先の五か所に垂(しで)を結え付けた上に、それぞれ菩薩(ぼさつ)の立像が浮かび上がる。榊と本地仏全体を背後からつつむように金色の円相(えんそう)が配され、外周にも光をにじませて、春日社入口付近の風景が表現されている。